

## 『宝髻經四法憂波提舍』における浄土観管見

華 房 光 壽

毘目智仙と瞿曇般若流支の共訳による諸経論の中には、世親による积経論が三部ある。すなわち大正藏第二六卷所収の、

No. 1526 『宝髻經四法憂波提舍』（『宝髻經論』と略。）

No. 1533 『転法輪経憂波提舍』（『転法輪経論』と略。）

No. 1534 『三具足経憂波提舍』（『三具足経論』と略。）

の三つであり、全て興和三年の八月から九年にかけて続けて訳されている。しかし、いずれも漢訳一本しか伝わらず、『宝髻經論』以外は、元の経本すら存在しない。この三つの积経論は、論旨の展開、体裁等極めてよく似ているが、既に述べたので、ここでは、繰り返さない。本稿では、特に『宝髻經論』における、世親の浄土観を中心に検討したい。

### 一 『十住毘婆沙論』とのパラレル

まず、補足的になるが、この三つの积経論の特徴として、注目すべきなのは、『十住毘婆沙論』（以下『十住論』と略。）に

パラレルな記述のある箇所が、確認できるだけでも、少なくとも四つある点である。ただし、この四つの箇所のだれ一つとして、何かからの引用であるなどということは示されておらず、完全に長行の中に埋没している。<sup>(2)</sup>ここでは、各々について、両者の相違点のみを挙げる。

(一) 如来・如去の義に関して

『転法輪経論』p. 357a29-b18, 『十住論』p. 25a23-b12

『十住論』では、如の義として、空無相無願・四諦・六波羅蜜・四功德処・一切佛法・十地・八聖道分・権智の順に説明するが、『転法輪経論』では、配列がわずかに異なり、四諦と六波羅蜜の間に「一切如是佛法」が入っている。）

(二) 菩薩の種姓（如来の家）に関して

『三具足経論』pp. 361c15-362a9, 『十住論』p. 25b18-c8

〔善方便は菩薩の父、般若波羅蜜は菩薩の母〕に関して、『十住論』には「如助道経中説」とあるが、『三具足経論』では、「如彼無垢名称経説」となっている。また、「般舟三昧は父、大悲無生

は母』については、『十住論』では、「如助菩提中説」とあるのに  
対して、『三具足経論』には、単に「偈言」とあるのみである。）

㊦ 器世間不浄・衆生世間不浄、浄土の相に関して

『宝髻経論』pp. 276c10-277a3, 『十住論』p. 32a14-b1(?)  
〔十住論〕では、この箇所の前に、「二種の不浄を具体的に詳細に  
述べているのに対して、『宝髻経論』では、簡単に述べるにすぎ  
ない。また、浄土の相については、後述のように、完全に対応す  
るわけではない。〕

㊧ 戒の功德に関して

『三具足経論』pp. 363b13-364a28, 『十住論』pp. 120a8-  
121a18 (この箇所はかなり長く、『十住論』の「讀戒品」全部に完  
全に対応している。)

確かに、この三つの积経論と『十住論』のどちらか一方  
が、他方を引用したのか、或いは、何らかの共通のソースが  
あったのかなどと様々な想像ができるが、引用したというこ  
とを証明できるような根拠は残念ながら全く見あたらない。  
しかしながら、全く無関係であるということも証明できな  
い。ただ、偶然にしては、あまりにもパラレルな記述である  
ので、ここでは、両者の対応する箇所を指摘するにとどめ  
る。

## 二 十二種諸功德場について

次に、『宝髻経論』に見られる「浄土の相」について検討  
する。先に挙げた『十住論』とのパラレルの㊦の中で、『十  
住論』では「略説浄土相。」(p. 32a)と述べ、以下、十を挙げ  
る。『宝髻経論』では、「唯説少分。」(p. 276c)とあり、十二  
種の要素を挙げる。論旨の展開からみて、この「十二種諸功  
徳場和合聚集」も、浄土の相を意味すると考えられる。この  
「十二種諸功德場(以下、十二功德報場と略)」の「功德場」と  
は、文字通り「功德のある場」を意味し、すなわち浄土を指  
しているであろうが、それだけではなく、「場」には、漢  
語本来として、「神を祭るための浄められた場所」という意  
味もあるので、「浄められた場所」ということを強調するな  
らば浄土と考えられなくもない。(ただ、毘目智仙訳の他の諸経  
論には、このような「場」の他の用例は、今のところ確認できない。)  
それ故、この十二功德場というのは、浄土の相であると考  
えられるが、その内容は、あまり類例がないようである。十二  
種を簡単にまとめると、浄土の国土に関するものとしては、  
「劫場」・「世界場」がある。浄土の衆生に関するものとして  
は、「衆生場」・「調御衆生場」・「直心深心場」がある。浄土  
の仏法に関するものとして、「時場」・「乘場」・「陀羅尼場」・  
「仏法場」・「聖場」・「道場」がある。それでは、この十二功

徳場は、どこに源流があるのか。この問題に関しては、結論的には、何に影響を受けたということを明確に言うことはできず、現時点では、何かからの直接の引用ではなく、この十二をひとまとめにするのは、この『宝髻經論』独自のものであると言わなければならない。しかし、十二功徳場と部分的に類似するのは、いくつもある。最も類似していると思われるものは、今まで比較した『十住論』に説く浄土の相である。挙げられる名称から考えても、次のように対応する。『十住論』の「仏功徳力」が、『宝髻經論』の「功徳場」に対応し、「法具足」と「十事莊嚴の中の」無求外道師」が、「仏法場」に対応し、「声聞具足」が、「衆生場」と「調御衆生」に対応し、「時具足」が、「十事莊嚴の中の」時具足」と対応する。ただ、『十住論』には、多くの記述があるため、内容的に会通するのにそれほど無理はないが、どうしても会通できないものもあることは否定できず、少なくとも『十住論』の膨大な記述を取捨選択して十二種にまとめたとは考えられない。他に類似するものとしては、『維摩經』「仏国品」にある十七項目の浄仏国土の行がある。これは、例えば、「直心是菩薩浄土。菩薩成仏時不諂衆生来生其国。」（羅什訳 203b）という定型句で示される。定型句を並べるといふ点では、十二功徳場に付加されている簡単な説明と類似し、また、内容についても、類似しているものもある。ただ、同じく「仏国品」には、

直心・發菩提心・深心と続き、説法淨・智慧淨に至るまで順序立てて説くものもあるが、十二功徳場には、相互の順序はない。また、世親の『十地經論』にも、七種の浄仏国土の相が説かれる。これは、初歡喜地の第七の大願について論じる箇所であるが、十二功徳場とはそれほど対応していない。世親の著作に関して、このような浄土の相について考える時、まず思い起こされるのは、『無量壽經優波提舍』である。しかし、十二功徳場は、『浄土論』の二十九種の莊嚴功徳と比較してみると、他の所に説かれる浄土の相と比べて、最も隔たりがあるように思われる。十二功徳場の特徴として、まず、浄土の器世間的な莊嚴について全く具体的ではない。（第一の「劫場」と第四の「世界場」において永続性と清浄性が述べられるだけである。浄土の個々の具体的な有様、莊嚴については、言及されない。また、極楽の重要な要素である光明の要素が全くないことも注目される。さらに、極楽の主である阿耨陀仏についても、全く述べられていない。この『浄土論』に説かれる二十九種功徳成就よりも、『撰大乘論釈』の十八円満の方が共通点が見いだせる。特に、興味深いのは、聞思修慧を以て、浄土に入る路とする路円満は、第十二の「道場和集」に対応し、また、奢摩他毘鉢舍那に乗るとする乗円満は、第六の「乗場和集」に対応する。以上見たように、十二功徳場に関しては、諸々の功徳は、それほど特徴的なものは

ないため、今のところ、何か一つによったとは考えられない。また、『浄土論』の二十九種莊嚴功德における詳細な描写、極楽の莊嚴の描写の有無、光明の有無などによって、『宝髻經論』と『浄土論』の前後関係を決定することはできず、世親の浄土思想の円熟期に、『浄土論』がつくられたとする根拠にもならないように思われる。それでは、何故、『浄土論』に、『極楽の莊嚴の記述があるのか』というと、それは、文字通り『無量寿經』の優波提舍であるからではないかと今のところは思われる。

### 三 浄仏国土について

しかしながら、『宝髻經論』の中で説かれるのは、静的な浄土だけではない。仏世界を清浄にするという「浄仏国土」の働きの方が重視されていると考える。まず、前稿で既に指摘したように、本来『宝髻經』においては、「四種浄行」が経の中心主題であったにもかかわらず、論主は、『宝髻經論』の中で「四種發起精進」が経の中心主題であるとした。この「四種發起精進」は、経の中では、名称があがっているにすぎない存在にもかかわらず、それを中心主題に据えたということは、論主に何らかの意図があったと考えざるを得ない。それではどのような意図があったのか。最後に、これについて検討する。さて、『宝髻經論』(p. 274b)には、「この世尊釈

迦牟尼仏の世界は、清浄か、不清浄か」という命題がでてくる。ここでは、もし、釈迦牟尼仏の世界が皆清浄であるならば、『阿弥陀經』にいう「我今出於五濁惡世。阿耨多羅三藐三菩提覺。」に相違するという。だが、世界が清浄であるということが、「五濁惡世」という語句に相違するという理由だけで、『阿弥陀經』のこの部分を取り上げられたのではないと考えられる。さらに、論主は続けて、もし仏世界が不清浄ならば、何故、「菩薩四種發起精進不離布施」と説かれるのか、という命題を出す。ここで注目すべきなのは、四種發起精進という語句が問題なのではなく、このように、世尊が説法したという事実を重視していると思われる点である。繰り返しになるが、第四の發起精進は、「清浄仏」之「世界發起精進」であり、「清浄にする」という働きが強調されている。この四種の中で最後の第四發起精進を以て、菩薩行は最高の段階となり、仏国土を清浄にすることは完成する。この四種發起精進を説いたという事実は、浄仏国土の願は既に成就しており、釈迦牟尼仏の世界は、既に浄土化されたことを意味する。この「説法した」という事実が浄土の完成を意味するということは、先学によって既に指摘されているように、「如去」という語を、「説法がなされた」と解釈することによって裏付けられる。そして、この如去については、前述したように、『十住論』とのパラレルの(→)に存在する。ただ、「如

去」について、『十住論』(p. 25b)には「如去不還故名為如来。」とあるだけだが、世親は、『転法輪經論』(p. 357a)において「或名如去。言如去者。或以如説故名如去。又如去者。去不復来故名如去。」というように「説法がなされた」という理解を明確に述べている。この「仏世界は清浄か、不浄か」という命題に対して、論主は、「今説清浄。何以知之。以世尊心善清浄故。」(p. 27a)と解答して、引き続き、『維摩經』「仏国品」の「菩薩欲得淨仏世界。当淨其心。」から始まる引用を以て、聖言量とするのである。かつて、山口益博士は、「仏国品」のこの部分に関して、「舍利弗が、不浄の穢土において、心浄の境地に証入するところに、土の清浄化の意味がある。そしてそれは、浄土教において、釈迦が、五濁の穢土に出世し、弥陀の本願を説き、有情の無明の闇が破られること、すなわち有情の浄化において、本願の成就満足することを説くのと同様の意図である。」と述べられている。山口博士のこの見解と同じ事が、この『宝髻經論』にも現れていると考えられる。

結論的には、世親によって、『宝髻經』をもとに構成された『宝髻經論』においては、単なる經の解釈だけではなく、『十住論』にも説く二種不浄を転じて浄土と為すことと、『維摩經』の「心清浄」とを用いつつ、論主の浄土観が説かれていると考えられる。そしてその浄土観も、静的な浄土の

相を述べるだけではなく、「清浄仏国土」を強調しようとする傾向が強いと思われる。そのために、經の設定を変え、世尊が、宝髻菩薩を対告衆として、(恰も、世尊が、舍利弗に、心清浄を説いたように、また、釈尊が、舍利弗に、本願の成就を説いたように) 仏国土の清浄化・浄土化がなされたという事実を説くという構成にはないかと考えられる。

1 拙稿 天親造『宝髻菩薩四法憂波提舍』に関して、『印仏研』四三―二所収。

2 もし、これらが、引用であるとするならば、このような引用の仕方は、毘目智仙訳の三つの釈經論においては、異例である。普通は、論書を引用する場合には、何も解説せずに、他の論書に任せるか、或いは、少し述べてから、さらに余義ありとして、他の論書に譲るといった形式をとっているからである。

3 山口益『大乘としての浄土』昭和六一年、p. 20

4 山口益『維摩經仏国品の原典的解釈』、『山口益仏教学論集』下』所収。p. 107

〈キーワード〉『宝髻經四法憂波提舍』、『十住毘婆沙論』、十二種諸功德場、清浄仏国土、如去

(大阪樟蔭女子大学非常勤講師)